

Ⅲ章 コンビニエンスストアを教材とする環境教育

1 節 コンビニエンスストアと環境問題との関連

コンビニエンスストアが環境問題発生源になりがちだということは述べてきたが、科学的に検証が必要になる。以下はある店舗の一週間の実績をまとめた表である。

(表 4) あるコンビニエンスストアの来客数と廃棄食品の合計金額

	来客数	廃棄食品
5/27(日)	1,107 人	29,377 円
5/28(月)	1,019 人	18,590 円
5/29(火)	961 人	18,271 円
5/30(水)	995 人	13,574 円
5/31(木)	1,006 人	20,669 円
6/1(金)	1,053 人	14,917 円
6/2(土)	1,083 人	13,127 円

(東京都練馬区某コンビニエンスストアのデータより、筆者作成)

廃棄食品はこの金額分の食品が、その日のうちに消費期限が切れて廃棄となったことを表している。コンビニエンスストアの弁当がほぼ 500 円以内であると考えたとしても、表中で最も少ない 6/2 ですら 26 個の弁当が廃棄されたことになる。

一日の来客数はだいたい 1000 人といったところであるが、これらの人物が全員袋などの無料のサービスを利用したとすればそれだけのゴミが出る。もっと言えば、これらの利用客が買った商品からも、個別にされた包装などのゴミが出る。

このように、コンビニエンスストアがその業態故に産出してしまうゴミの量は相当なものになっている。また見逃してはいけないのは、これが日本に約 4 万店以上あるコンビニエンスストアの中のたった 1 店舗の事例でしかないことである。上記のデータは都内の住宅街に位置する店舗のものであるが、より都心部に近い駅前に位置している店舗では、この何倍もの来客数を記録するだろう。日本国内でコンビニエンスストアから出されるゴミの量は例え 1 日単位でも想像し切れないものなのである。

廃棄処分となる食品がこれだけ多いことも、その業態に起因している。各店舗への商品の運搬は、各店舗に最寄りの工場から長距離トラックで 1 日に数回配送されてくる。ほとんどが 24 時間営業の各店舗では、通常の業務と同時進行で、配送されてきた商品を陳列しなくてはならない。当然ながら消費期限が切れた商品を下げていくことも、通常の業務との同時進行となる。その際に商品の消費期限に個体差があれば、通常の業務が滞ってしま

う。そのため、同じトラックで配送されてきた商品に関しては基本的に同じ時間に消費期限が設定されており、決まった時間にまとめて廃棄処分とすることが可能なのである。たしかに効率はよいが、画一的な管理ゆえに購入される機会を逃すことになっている商品もあるだろう。しかし効率の良さを度外視して商品を売ろうと考えたとき、一度でも消費期限が切れた商品を売ってしまえば、顧客の信頼を逃してしまうことになりかねない。またそれだけではなく、本社とのフランチャイズ契約を切られてしまうことにもなりかねないのである。コンビニエンスストアのほとんどがフランチャイズ契約を結んだ自営業である以上、その危険は冒せないと考えるのが普通であろう。したがって、廃棄食品の数が画一的な管理によって増大することは避けられなくなるのである。

またこの画一的な管理は、配送トラックの本数にも影響を与えている。大気に与える影響を考えれば、その本数はなるべく少なくするべきだろう。しかしすでに述べたことだが、同じトラックで配送された商品はすべて同じ時間に消費期限が設定されているため、一日に一度の配送で済ませてしまえば、一日に一度、残っているすべての食品が廃棄処分になってしまうのである。24時間営業である以上、商品が全く置かれていない状態などはあってはならない。だから一日に何度も配送のトラックがやってくるのである。

コンビニエンスストアの利便性、具体的に言えば、24時間営業であることや、いつでも新鮮な食品を手軽に購入できることといった点は、環境問題への影響を考えたとき、上述のような思わぬ弊害をもたらすことになる。

しかしこれらの弊害は、現行の業態では容易に克服できないものとなっていることもわかる。逆に言えば、容易に克服できない問題だからこそ、未来を担う子どもたちに認識させ、注視させることが必要になるのである。また、容易に克服できない問題であると認識するためにも、コンビニエンスストアをひとつの社会問題が湧出している場と考え、その立場がどのようなものであるかを認識することが必要になる。前述の通り、社会的役割への確実な認識を得てからでないと、より現実にそくした「社会参画」のための提言にならないような問題なのである。本論が目指す「社会参画」力の育成過程としては適切な教材となりえよう。

これらのようなコンビニエンスストアの立場を理解するための教材として、2人の人物にインタビューを実施した。節を改めて、それを紹介していくこととする。

2節 コンビニ関係者へのインタビューから

(1)インタビューの趣旨

ここまでコンビニエンスストアを教材とした環境教育の授業開発を行うために、コンビニエンスストアが抱える環境問題の発生源となりうる要素について論じてきた。続いてコンビニの経営に携わる立場の人物に、環境問題についてどう考えるか、どう対応していくのかといった点を聴取するべく、インタビューを行った。インタビューについては二人の人物を選定した。一人目は、実際に店舗を経営する店長である。各店舗が抱える環境問題の発生源について、一番に対応できる人物であり、考えるところもあるだろう。また、一店長という立場で、どれだけのことができるのか、あるいはどれだけのことを本社から指示されているのかについて聴取することができれば、本社の環境問題に対する認識や姿勢の実態が見えてくる。二人目は、本社で環境問題の対策を担当している人物である。実際にチェーン店として全国展開している店舗に、どのような対策を取らせるべきと考えるのか、そこにはどのような思想があるのかについて聴取していく。店長から聴取した結果と照らし合わせることで、コンビニエンスストアが、環境問題に対してどのような姿勢を持っているのかという実態が見えてくる。そして結果として、各店舗に環境問題の発生源が存在してしまっていることがなぜなのか、探ることができることだろう。

(2)店長へのインタビュー

①今回のインタビューの概要

今回は、東京都練馬区でコンビニエンスストアを経営する相良店長にお話を伺うことができた。相良店長は現在 35 歳。17 歳のときのアルバイト先にそのまま就職し、現在に至る。店長となったのは 2 年半前で、現在の店舗が初めてだったそうだが、それまで他の店舗で副店長などを務めてきている。

前述の趣旨をもとに、以下の 3 つの大きな質問項目を用意した。

- i - 店舗に環境問題の発生源が存在することについてどう考えるか。
- ii - 自身は環境問題にどのように対策をとっているか。(対策をとっているという意識はあるか。)
- iii - 本社から指示されている対策はあるか。あるならそれで十分と感じるか。

インタビューは 2012 年 5 月 3 日 (木) の 18:00 から 1 時間、相良店長が経営する店舗にて行った。以下、それぞれの項目についてお答えいただいたものを、再構成し記述する。

②インタビューから

i 店舗に環境問題の発生源が存在することについてどう考えるか。

たしかに指摘の通り、コンビニの店舗には環境問題の発生源になるものはありますね。あることはわかっているけど、それをなくせばビジネスとして成り立たなくなるんです。例えば箸だとか袋だとか、お客さんに無償で渡しているサービスを、ゴミ問題の温床になるから、といった理由で廃止したり、有料化してしまえば、コンビニ最大のウリになる、利便性が損なわれます。そうなってしまえば、スーパーなんかの小売業界の他社に、コンビニは勝てる点がなくなる。それくらい一店長の私でも、本社の偉い人たちでもわかっていることだから、関係者は全員目を瞑っているというのが現状と言えるでしょう。もし本社がゴミ問題の温床に目を向けて、現行のサービスを廃止したりするならば、ビジネスとして成り立たなくなることが目に見えているので、きっと私はすぐに経営者を辞めて、新しい職を探しますよ。ボランティアでコンビニを経営しているわけではないので。

ただやっぱり、そのような批判の矢面に立ちがちな業態であることは自覚していますよ。本社の人間もそうでしょう。だから直接その問題を根絶することはできなくても、別のところで環境に配慮する姿勢は持っているみたいです。

ii - 自身は環境問題にどのような対策をしているか。(対策しているという意識はあるか。)

率直に言わせてもらえば、何もやっていません。環境問題に対策することがそのままビジネスになるのなら率先してやりますが、そうではないんです。よく言われるのが廃棄食品の分別ですが、それだって業者任せです。

下線部註：コンビニエンスストアで、賞味期限切れになった食品は、廃棄食品としてそのまま捨てられる。そのシステムがもつたいないとして批判されてきたが、現在コンビニ各社では、廃棄食品の食品部分と容器の部分を分別し、食品部分を肥料として活用することが一般的である。その作業は他の業者が担っているため、店舗では特に何も意識せずに、賞味期限が切れた食品を袋に詰めてゴミに出すことになる。

もし業者が廃棄食品の分別をやってくれなくなり、各店舗でやってくれと言われれば、本社や周囲の目をかいくぐってでも、今まで通り、廃棄食品を捨てると思います。極端な話、環境を汚染したり、適切な再利用が出来ないことよりも、自分の店の経営で利益を出すことが大事です。弁当が一個 400 円だとしたら、一日でそれが数十個分廃棄になることもしばしばあります。そんな大量の弁当を食品と容器に分別してゴミに出すなんて、それだけでとても時間がかかります。時間がかかるということはそれだけ人件費がかさむということですから、店にとっては損でしかありません。私自身がやれば人件費も削減できますが、別段賛同できない環境対策のために、仕事の時間は割けません。ただでさえ仕事量は多く、時間に追われるような業務内容なので。